

昭和の南海地震体験談

氏名:坂下 緋美(さかした ひみ)
生年月日:昭和 16 年 6 月生
地震を体験した場所:印南町
当時の家族状況:父、母、兄二人、弟、妹



1) 地震発生時の状況

当時 5 歳、その日、父と長男は、勝浦で漁をしていた。

次男は、町内の友達の家に行っていて留守。

地震で、母に起こされ、服を着替えるよう言われた。母は風呂敷抱えて、生後 6 ヶ月の妹を背負う、私は弟の手を引き、表に出る。

浜で塩炊きしていたおじさんが「津波や!津波や!」と知らせ回っていた。

家を出た所で、友達の家に行っていた次兄が、戻って来てくれて、弟を抱え、私の手を引き、近くの山に向かうが、狭い登り口に、人がごった返し、回り道する。

2) 津波襲来時の状況

回り道した、広い道で、津波に遭遇。あまりの急流で大人の膝辺り、私は腰近くまで濡れた。

足をとられた瞬間、次兄が「危ない!」と腕を強く引っ張ってくれて、助かった。

道の真ん中は急流になっていたの、家の軒下を、手当たり次第、掴みながら、山に向かう。

途中、次兄の友達の家で避難させてもらった。

3) 家族の行動・被害

5 人全員無事

4) 集落・周囲の被害

当日、父と長兄は、勝浦で地震遭遇。兄にそのときの様子を聞いたら、漁港の魚問屋の 2 階の宿屋で寝ていて、揺れで飛び起きて、父は船で沖に出ようとしたが、船が持ち上がるぐらいに横揺れしたので、慌てて船から飛び降り、足首骨折。

その父を背負い、長兄は、山に逃げて無事。翌日、知人を乗せて、印南港に戻った、西風が強かったことを覚えている。集落では 17 人死亡。

家は床上浸水、川沿いの家は流出、倒壊、床上浸水と様々。避難する途中で流された人が多い、濁流があまりに急で、思わず子や孫の手を離してしまった人、背負っていた祖母が落とした荷物拾うときに、祖母をすべり落として潮で持って行かれた人など。

戦後で集落の男性が、まだ復員して居なかったり、戦地で死亡したため、祖父母が孫を見ていた家が多かった。

5) 地震・津波後の生活

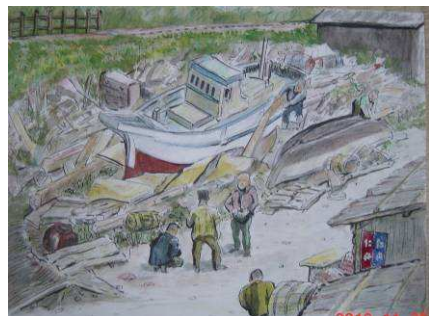
床上だが、畳が濡れた程度で、多分、そのまま掃除して住んだと思う。
まだ子供だったから覚えていない。

5) 次の災害への備え

古いほうの家は不安だが、今の家は少し新しいし、梁も太いのが渡っている。
やっぱり南海道地震で逃げた山に避難する予定。
地域の子供達に伝承する、体験談を綴った冊子も作っている。

6) その他

日本画は 浦森 勉氏



左上: 浜の様子

右上: 要害山に、我先に登ろうと、ごった返す登り口

左下: 浜からの津波で、急流になった道

右下: 印南川の津浪後の様子